
涼宮ハルヒの世界で異世界人としてテキト～に生きていこう！

UMA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの世界で異世界人としてテキトゝに生きていこう！

【Nコード】

N9601W

【作者名】

UMA

【あらすじ】

涼宮ハルヒの二次創作デス！

読んでくれたら嬉しいデス！

プロローグ

「ここは、どこだ？」

唐突にそう呟いてしまった。

目が覚めたと思ったら周りは知らないところ。

て、感じ。

普通に考えたら攫われた？のかな。

でも違う。だって・・・

「すまん！この通りじゃ。」

目の前で土下座して俺に謝っている爺さんが居るんだもの。

.....

いろいろありました。ええ、それはいろいろ。
爺さんがすっごい顔をぐしゃぐしゃにしながら泣いてるんですよ。
ずっと『すまんのお、すまんのお』って言いながら。
なんかこっちまで泣きそうになったよ。

閑話休題

今は爺さんにこの状況の事を聞いている。

「で？なんで俺はこんなところに居るの？」

爺さんに聞いた。あ、もう泣きやんでるよ。

「おぬしは死んだのじゃ。」

「……………は？」

「正確にはワシの不注意で死なせてしまったんじゃ。」

「マジで？」

「マジで。」

「どっやって？てか、爺さん何者？」

「神」

紙？髪？神！

神様が！

「そうそう」

心読まれた！

「それでの？ホントはまだ死ななかつたのだが。すまんのう……」

「い……いえ、いいですよ。さっきあんなに謝られた意味が分りました……そうですか、俺しんだんですか……」。

死んだのかあ……みんな元気かなあ……

「そこでじゃ！」

「はい？」

「おぬしには生き返ってもらおう。」

マジで……やった！生き帰れる！

「しかし！元の世界には生き帰れぬ。」

「ええ……」

これ本心。

「なんか……そうじゃの、涼宮ハルヒの世界とかどうじゃ？そんなに危険もないし、面白そうだし。」

う……ん。まあ、いつか。嫌いじゃないし。

「いいですよ」

「そうじゃな。ふむ……何か願いを5つ叶えてあげよう。」

「マジで！それじゃあ……」

涼宮ハルヒの世界ではチートはいらないよなあ……

「とりあえず、かなり頭を良くして、身体能力、反射神経をあげてくれ。」

あとは……もしものために体を普通の人の2倍ぐらい強くして。」

「……そんなくらいか？」

「うーん、他に入らないかな、と言っか思いつかない」

「そんなもんかの、普通だったら、最強にしてとか言っくんじゃないのかの？ほら、なんかカツコ良さそうだし。」

「別イイよ、と言っわけでもよろしく。あ、残りの1つは適当にやっとして。」

「わかったぞい。ホレ行って来い」

神様がそれを言った瞬間……

「落ちるう~~~~~!!」

下に開いた穴に落ちて行きました。

1話

「……………ハッ!？」

此処どこ?!……………部屋?

「俺は穴に落ちてから……………」

そのとき何もないところから紙が落ちてきた。

「なんだこれ?」

そこには……………

『少年へ

おぬしは涼宮ハルヒの世界に異世界人として生まれたのじゃ。

今は原作3年前じゃ、お主は今12歳小学校を卒業して

1ヶ月後には中学校に入学じゃ。

そこで、涼宮ハルヒの入学する中学校が、

キョンが入学する中学校のどちらに入学するか決めてくれ。

それとお主のことだけど親はいない。一軒家で一人暮らし。

家の場所は北高の近くにしたいからの。

戸籍とかいろいろはわしのほうでやっておいた。

金の心配はいらん。学費なんかもわしが何とかする。

なにか買う時に使いたいときは近くの戸棚の中身を見てくれれば

何とかなるはずじゃ。

あとは、読者の皆様に自己紹介よろしくの。

神より

いろいろめんどくさいの請け負ってもらったな。まあいいか。そっ
ちのほうで楽し。

とりあえず自己紹介をしとこうか。

俺は桜井 優真前世では13歳の中二でした。

このころライトノベルにはまってね。全巻揃ってたのはハルヒシリ

ーズだけだったな。

まあ、それはいいとして。

この世界でも名前は同じでいいのかな？

後で戸籍確認しておこう。

閑話休題

中学校はどうしようか。

ハルヒと会ってみたいけど、キヨンと仲良くなっという方が後々いろいろいいよな。

よし！キヨンが居る方にしよう！

また紙が落ちてきた……………

『ほいじゃ決定じゃの。』

制服とかはリビングに置いとくからの。

名前やら、誕生日やらは前世と同じにしといたからの『

こうして、俺の生活が始まったんだ。

1話（後書き）

三二話

優真「この中に金が入ってるんだよな」

あけるとそこには……

優真「一億円ぐらいの札束がッッ」

お金には困る事は無いと思う優真くんでした

2話

「とりあえず家の中を見てみるか」

最初に居た部屋は大体調べた。

ベット、学習机、イス、テーブル「小」、本棚、タンスなどがこの部屋にあった。

タンスの中には俺の服が入っていた。

だけど、一番下の段にはギツシリと札束がね。あつたんですよ。あれにはびっくりしたね。

この家の部屋割は………1階に3部屋、2階に2部屋ずつあって、リビング、キッチン、があった、トイレは1、2階に一つずつ、風呂は一階に、冷蔵庫やら洗濯機やらすべてが最新だった。後テレビが大きかった。100インチ以上は絶対あった。あとブルーレイとかPSSとか全部あってびっくりしたね！

マジで神様ありがとう！！

閑話休題

今はリビングに置いてあった制服とかをかたずけてる。

めんどくさかったよ。鞆とかいろいろ名前書いたりするの。

………

………

………

「終わった~~~~~!!」

いやほんと、疲れたよ。

そして今、夜8時。

夕食作るうとしたら9時になるな。

そうときまったら外食だ!

.....移動中.....

「ん?」

そこには一人の女の子を囲んでいる三人の男の姿があった。

「ようよう嬢ちゃん俺達と遊ばないか」

「そうだぜ、楽しいところ行こうぜ」

「.....」

「おい、なんか言えよ」

よし、こいつらをチンピラA・B・Cと呼ぼう。

「おい、そのチンピラABC！その娘をなにに変な所に連れて行くとしてるんだよ。お前らみたいな奴に絡まれて可哀相じゃないか。」

チンピラA「ああ！なんだお前、ただのガキじゃねえか、なめた口きいてんじゃねえぞ！」

チンピラC「ガキがツツ！家に帰って親の乳でも吸ってな！！！」

「なにおまえら？アホなの？それともバカなの？女の子一人に三人の男で囲むって、屑？あ、いやこの場合はくそ野郎でいつか。それで？なに？そんなに顔赤くして？あ、なに？照れてんの？おまえら有害なただのウイルスがくそ野郎として人間って認められたから？ハハツ楽しい人生歩んできたみたいだねえ。」

チンピラABC「『ごうらあ！！！！！！』」

チンピラどもが殴りかかって来た、神様に頼んだこのスペックが良い体試してみますかね。

顔面めがけてAのパンチが迫るのがよく見える、俺はそれをよけてAの腹めがけて右手を……打つッ！！

『ドゴッ』

「『へッ？』」

俺とBCは変な声を上げる。

人の腹殴ってこんな音でたらさあ。そりゃ、ねえ？
BCも驚いて動けなくなってるし。

『ドサツ！』

あ、Aが倒れた。

B「ヒイツツ！」 C「バ……バケモノツ！」

そしてBとCが逃げていくと。

女の子の方は……

「……………」

目え見開いて固まってるよ。

まあ、いつか。

「大丈夫だった？それじゃ俺行くから。」

女の子「……………あっ……ああ」

そして近くのファミレス行って戻って来たころには女の子は居なく、
倒れているくそ野郎が居ただけでした

2話（後書き）

佐々木を出したいんですが……

原作で下の名前出てなかったと思うんですよ。

と言っわけで！

名前考えてくれませんかね？

すみません！危機なんです！

3話

入学式まであと、3週間。

「ふあゝあ、よく寝たゝ！」

あれから一週間。

何もありませんでしたゝつと。

まあ、いろいろ買ったんだけど。

パソコンとか、その他イロイロ。

まあ、そんなわけで

「ひまあゝゝゝゝゝ」

なんですよ。

一週間でここら辺の地理も覚えたり。

原作に出てくる集合場所とか図書館とか全部見たり。

家でダラダラするしかないんですよ。

現在午後2時

昼飯作って食ったけどまだこんな時間だし。

適当に外ぶらぶらするかなあゝ

……… 適当にぶらぶら中 ……

……… あ、なんか変な人が居ると思ったたらハルヒじゃん …… つて、ハルヒ！

なんでこんなところに？！

つて、あれ？ここどこ？

あ〜〜！！無意識に歩いてて知らないところまで来ちゃったよ！
つて、なに？！ハルヒがこっちに来るよ！！

「ねえ！あんた！ここらへんでなんか変なの見かけた！？」

え！！なに？！目、つけられた！それとも周りの人に聞いてんのか
な！？

「何きよろきよろしてるのよ！あんたに言ってるのよ！」

「………さいですか？」

「そつよー！ー！」

なんでおれ？て言うかハルヒってこんなだっけ？まだこの頃は一匹狼なんじゃないの？てか今が変わったらだめじゃねえ？朝倉さんとの死亡フラグを回避せねば！

「俺は何も見えてない！！だから関わるな！じゃあな！」

そうして俺は逃げました、高一になるまで絶対会いません！これ、決定！

3話（後書き）

名前をどうしよう？

この中から決めてくれませんか？

- 1、陽菜ような
- 2、麻衣まい
- 3、恵美えみ
- 4、その他、名前を書いてください。

3・5話(前書き)

今回はハルと主観でいきます。

短いです。

3・5話

東中学校に入学することになった私は休み期間中不思議探検をすることにした。

ふしぎ探検 一日目

今日は駅の近くを探した。

途中変な男にナンパされて散々だった。

…………… 二日目 ……………

今日も何もなかった。

…………… 三日目～五日目 ……………

二日目と同様。

…………… 六日目 ……………

今日はいつもと違って夜に探してみた。

そしたら私と同じぐらいの歳の落ち着いた感じの美人がナンパされていた。

止めに入ろうと思ったがその前にまた同じ年ぐらいの男が止めに入っていた。

相手のお腹をパンチした時にすごい音がした。

もしかしたらあの男は普通の人じゃないかもしれない。

…………… 七日目 ……………

今日あの男を見かけたので声をかけた、とりあえず話がしてみたか

っただけだったから目的はそんなになかった。

そして声をかけたとき、ちょっとあせったようにしてこっちの質問に答えたら

逃げるように去って行った。

結局何も起きなかった。やっぱり普通の人しか居ないんだなと思った。

宇宙人とかかと思ったんだけどアレはただの人間だ。

3・5話(後書き)

アンケートをお願いします。

4話（前書き）

アンケート結果は……一人しかやってくれませんでした。
ずっと待っててもダメなので再開します。
名前は2の麻衣で決まりました。

4話

（入学式当日）

やっときました！入学式！！無駄に元気がありすぎて困ってしまう
優真です。

とゆう訳で、今、朝7時。

朝8時半までには学校に行かないといけませんから。

朝食作り30分ー朝食15分ー学校の準備15分

こんな感じでいけたらちようどいいですねえ

学校に着くまで飛ばします

「8時20分か」

学校に着きました。結構ギリギリでしたね。

とりあえず教室は……………1-1組から1-6組まで俺は2組。

キヨン君は4組。あ、国木田もいる。

そういえば分裂と驚愕にでてきた佐々木もこの学校なんだよな。

お、見つけた。2組、同じクラスだった。

まあいいか。

……………クラスにて……………

ーーがやがやーー

ーーがやがやーー

席は出席番号順に。俺は9番。

『オィあの子可愛くね?』 『うんうん!!』 『あんな娘彼女逃げ着たらな〜』

男子達【約数名】が一人の女子を見て言っていますな。
ん? 見ているのは俺の後ろの娘?

そう思っつて振り返ると……

居たね。美少女が。

落ち着いてる感じで物静かな感じの彼女。
なんか振り向いた瞬間驚いたような顔をしてたけど。

そんな事を思っている。

この学校の職員であろう男の先生が来た。

「ほら〜みんな席に就け〜」

これからそこに居るみんなが1年間を共にするクラスメイトだ。
みんな仲良くな〜」

元気で陽気でフレンドリーな先生。第一印象はすごくいい人。

「それじゃ今からみんなに自己紹介をしてもらおうから。名前と趣味とかいろいろ言っつていいからな〜」

それじゃ出席番号一番から! あ! 先生の名前は坂本さかもと 啓吾けいごだ。坂本先生でも啓吾先生でもどつちでも呼んでくれ〜」

それじゃ一番から〜と先生が言っつて1 2の自己紹介が始まった。

そして今は8番の人の話が終わっつて俺の番になった。

「はじめまして、俺は桜井 優真と言います。趣味はスポーツや読書、いろいろな事に挑戦することです。これから一年間よろしくお願ひします。」

そして後ろの娘へ…

「みなさんはじめまして。いや、一人は久しぶりかな？まあ、いいか。私は佐々木ささき 麻衣まいこれから一年間よろしく頼むよ。」

そう！！後ろに居た美少女「佐々木さんだったのだ！」

4話（後書き）

佐々木の性格、と言つか話し方あってるかな？

5話

……ただいま午後3時……

学校でいろいろ配られて放課後？な時間。

みんなそろそろと帰っている。

馴染めないで一人で帰っている者や友達同士で固まっているグループなんかある。

もちろん俺は一人で帰る方だ。

準備が終わって家に帰ろうと席を……「ちょっと良いかな？」……立たなかった。

なんで後ろに居る佐々木さんが話しかけてくるんだ？

「……………えっと、何でしょうか？」

「良いよかしこまらなくて、そうだね。君なら麻衣って呼んでもいいよ」

「そうかい、それじゃあ麻衣さん。あなたはどうして私を読んだのでしょうか？」

「そうだね。ここじゃ場所が悪いから移動しようか、優真くん。」

そういつて立ち上がり歩いて行く佐々木

「はいはい」

それに付いて行く俺。あ、鞆持っていかないと。

……使われていない教室……

「で？どうしてこんなところに呼んだのかな？」

「少しお礼が言いたくてね。」

お礼？俺なんかしたかなあゝ

「俺、なんかした？」

「してくれたよ。面倒なところをヒーローの様にやってきて嵐の用にさっていたね。でも…その時はありがとう。」

「え…あ…うん…どういたしまして」

うわ、何だろう……すごくかわいい。なんかお礼をするのに慣れてない感じで、でもそこが良い！！

「………お礼と言っではなんだけど、今度一緒に喫茶店でも行っっておごらせてくれないかい？」

なんとっ！！デ、デートですか！いや、勘違いしてはダメだ！！これはお礼！これはお礼！

「はいっ！喜んで！！」

「ふふ…そんなにうれしいかい？」

「そりゃあ、佐々木さんみたいな人とお礼とはいえデートみたいな事をするんですからね。」

「！…！…！…そうかい／＼／」

こうしてお礼と言う名のデートができるわけだ。
俺にも春が来たっ！！あつ、いかん、勘違いしてはダメだ。佐々木
さんはそんな気はないかもしれない！！ただのお礼かもしれないの
だ。

5話（後書き）

主人公変態気味
次は自重しよう。

6話

「やあ、優真くん。」

今は商店街の入り口付近の公園。

佐々木との待ち合わせの時間俺が先に来て今、佐々木が来たところ。女性を待たせるのはダメだよ。

「こんにちは。佐々「麻衣と呼んでくれていいよ。」それじゃあ麻衣さん今日はよろしくね。」

「ああ、よろしくね、優真くん。」

こうして始まる今日の日。

今日は今までの人生で一番楽しい時間になれそうだ。

「それじゃ、行こうか。」

歩き出す。特に行くところがないからね。

普通だったら考えておくんだけど今回は佐々……ゴホン。麻衣さんの案内だからね。

とか考えている内に着いたみたい……ってここ原作の喫茶店じゃないか？

いつの間にかここまで来てたんだ？

チリンチリン

「いらっしやませ〜」

麻衣さんと俺は二人用の席に座る。

「それじゃあ私はコーヒーを」

「僕も同じのを」

ゆったり話す……………

注・ここからは会話文。

「ありがとうね誘いに答えてくれて。」

「いやいいよ。麻衣さんみたいな人と一緒にこんな風にお茶できるんだから。」

「ふふ…、ありがとう優馬君。ところで聞きたいことがあるんだけど?」

「なに?麻衣さん」

「君は僕のことをどう思っているのかな?」

「えっと……………、そうだね、僕の第一印象だとかわいい子というよりきれいな子だったかな?最初の出会いがあんなだったからどう思ってるんだろ?と思ったんだけどね。」

「どうして麻衣さんはこんな事を聞いてくるのかな?」

「僕は普通の人だよ。」

「そうか……………どうやら君は僕に好意は持っていてloveじゃなくてlikeの方みたいだね。」

「少しほつとしたような、けどちょっと残念かもしれない。」

「どうして麻衣さんは好意を、異性からのloveを気にするのかな?」

ここからは会話文だけ終了。

「僕はね、友達がいなかったんだ。こんな性格だからね。だけど僕の外見だけを見て好きだと言ってくる人がいたしかも大勢。僕はいやだったよ、すべて断り続けた。そんなあるとき女子たちの僕を見る目が変わってんだよ。『あいつは 君をフツた』 先輩をあの子がフツた』とかね。それからほどかったよ。」

俺は思ってしまった。子供と言うのは残酷で陰湿で相手の痛みを知らずただ怒りに任せて行動するものだと。

「最初は良かった。靴を隠したり、集団無視してきたり。それだけだった。

だけどそれを一週間も続けると次の段階に移行した。

机に落書きをされたり、鞆をあらされたりね。

まだ、教師が止められる範囲だったからね。だけど担任の教師は無能だった。

子供たちの暗いものを含んだ目をただの純粋な目だと思っていた。

┌

俺はどうしてこんな話をされてるんだろうと思ってしまった。

だがしかし、そんな感情よりも怒りの感情が勝ってしまった。

しかし怒ってはいけない。佐々木 麻衣は桜井 優真に自分の過去を話しているのだ

この話を遮ってはいけない。それは麻衣の覚悟を否定してしまうものだから。

だから俺はその声を聞く。

「その頃は小学五年生だった。まだこんなことが一年続くのかと思つたら自殺でもしでかさないと思つた。でもね、家族がいた。ただ唯一自分のすべてをわかってくれている人がね。それまでは家族に心配させまいと黙っていた。でもねばれてしまったよ。親は怒つて教育委員会に訴えそうになった。」

それを僕は止めた。あの子たちは事の重大さをわかっていなかっただけなんだ。

だから許してあげてほしいと。だけどそれとほかに僕は頼んだ。転校させてくれと。

僕の心はあのままだったら壊れてしまいそうだったから。」

話を聞く。それを頭の中で思い浮かべる。一人の少女が周りの子供たちにいじめられている姿を。

それはとても、悲しかった。

「それで転校した。それから女子たちとは普通に話しても男子とはあまりかかわらなかつた。

もし話しかけてきても、こんなしゃべり方の変な子と思わせた。

そうしてそのまま卒業。そして君と出会つたんだ。あの日は夜道を少し歩いてみた。

そうしたらすぐに声をかけてくる奴が来た。だけどねそれを助けてくれる人も下心がすごい出てたんだよ。そこに現れたのが君。君は何も考えずに助けてくれた。初めてだったよ。その時はうれしかった。」

今までのことを聞いた。それを聞いた感想はなかつた。ただ君を守りたいそんな思いが芽生えていた。

どんなことから守つて見せるそんな思いだった。

「そして今、ここで君に話した。不幸な女だと思つて帰つてくれて

もいい。でもねこれだけは言える。

私の持っている好意はI i k eではないと。」

言っている意味がわかった。そして一人称が私になっていることも。

これは彼女の本心だ。

そして、俺、桜井 優真はそれを拒否する思いはない。

「私は君を愛してる。」

それが佐々木 麻衣の話の終わりの言葉だった。

6話（後書き）

尚、これは作者の妄想です。真に受けないでください。

主人公設定・1 (前書き)

とりあえず設定。

主人公設定・1

主人公

名前

桜井 優真

年齢【今現在】

12歳

誕生日

2月29日【閏年以外は3月1日でお願いします。】

家族構成

一人暮らし。

母と父は死んでいる事になっている。

転生特典

身体強化。反射神経強化 頭脳、知能の強化、体力は23歳ぐらいのスポーツ選手の2倍ぐらい。

残りの一つは実は決まっていない。

神様がなんかのために残してる。だが主人公はそれを知らない。

異世界人特典

ハルヒの改変能力を受け付けない。

字数稼ぎ

.....

.....

.....

主人公設定・1（後書き）

こんなところ。

第二弾もやるかも。

7話（前書き）

更新ペースがどんどん遅くなってきているような気がする……

7話

あれから半年が経った。

その後、自分の気持ちも麻衣に伝えた。
それで付き合うようになって半年。

今は九月の中旬気温がちょうどよくなっただくらいかな？

なんでここまで飛んだかと言うとそこまで伝えることが無かったからだ。

週一でデートをして学校行って、周りからリア充め！と言われるけど、ふざけてる範囲で。

まあ、充実してるね。

学校の成績はトップ。運動も同じ、友達も結構できたし、麻衣との関係もうまくいってる。

唯一大変だった事は、麻衣が本気で怒ったときだね。あの時はやばかった。

あ、キョンとも一応友達になった。後、熟通ってる、もちろん麻衣と同じ所。

他には………ない。特にない、暇だ。

今日は休日。特に遊ぶ約束もしてなければ、何かやる予定が無い。

7月の笹の葉ラプソディも消失も関わらななかった？

ヤダヨめんごくさい。それは未来の俺に任せる。

.....

.....

.....

.....

そうだ！出かよう！

俺は外に出てとりあえず歩きました。途中であの喫茶店に寄ったり、図書館行ったりした。そして今。

pm04:30

ちよ〜びみよ〜な時間。やる事が無い店行っても買わない。＝やる事が無い＝帰る。

そして帰る、帰ったら飯作る。食べる。
今

pm06:30

暇。

これだけ、やる事と無い。と言っか高校は居るまで事件と言っ事件が無い。

~U9CUN

7話（後書き）

どうでしょう？

ネタが思い浮かばん。

長門に会わせるか？それとも未来人？それとも機関か！？！
マジでどうでしょう？

……高校まで飛ばすかな……

いやな人言っで。ちゃんと考えるから。

佐々木とのデートとか。

8話

中三になりました。

そして原作どおりキヨンが塾に入って来た。

それからは塾の日は一緒に行くようになった。

学校での席は…

俺 モブ

佐々木 キヨン

モブ モブ

と言う感じ。

いつも学校では三人で話している。

麻衣はキヨン【と言うか俺以外の男子】には、一人称は僕で通している。

俺と麻衣が付き合っているのはみんな知っているので、あまり邪魔してこない。

だが休み時間だけは麻衣がキヨンに難しい話をしている。

そしてキヨンはその意味がよくわからず呆けている。

大丈夫だキヨン！俺も話している事の60%は分らない事が多い。
なんで学校ではこんななのかな？俺ん家来た時にはあんなに可愛かったのに！

あ、ヤバいあの時の事を思い出すと急に顔がニヤける。

「おい、何お前はニヤけてるんだよ。」

「ああ、すまん、麻衣が俺の家に来た時の事を思い出してな……」
すると麻衣は頬を赤く染めて、

「おい優真！！あの時の事は言うなよ！」
と言ってくる。いつもはクールな麻衣がこんな顔するからいじめたくなる。

あゝおさえろ俺！もう今日は寝させないぜ！お持ち帰り！」ってふざけてみたり。

「あつ……う……その……／＼／＼」

赤くなるなそこでえ！ホントに持ち帰るぞお！！

「……………はあ……………」
こらそこ！キョン君！ため息吐かない！幸せが逃げて行くぞ！

「……………ホントに優真と佐々木さんは仲良いね」
そしてこんな状態の俺たちに突っ込む国木田君。
違う！仲が良いんじゃない！愛し合っているんだ！！」あ、声に出ちまった。

男子どもからは【キョン、国木田除く】

『くそ！！リア充めが！！べ…べつに羨ましくなんかないんだからね！！』

と、聞こえる。言っとくけどキモいぞ。それをやって可愛いのは女子だけだ！！

『解ってるやい！！』

一方女子は【麻衣除く】

『いいな〜佐々木さんあんなに愛されて〜私も彼氏ほしいな〜』
どと言っている。

大丈夫だ！！君たちは可愛いからすぐに彼氏なんか出来るさ！（キラッ

『優真…それはどうゆう事かな？【怒】』
は？！めっそうでもありません！私は佐々木 麻衣様の事をこの世
で一番愛しております！！だからその禍々しいオーラをお納めくだ
さい！……！！

『よろしい』
…ほっ。

〜sideキョン〜

「……………はあ〜〜……………」
こいつに会ってからいつもこんな感じだ。このクラスにまともな男
子は俺以外に国木田しかいないのかっ！！

〜キョンend〜

こうして俺たちの最後の中学校生活が過ぎてった。

そして俺は来年。北高入学に向けて準備を進めていった…。

8話（後書き）

次から原作突入〜！

ここでアンケート！

優真をSOS団に入れるか入れないか！
どっちにする！

？入れる

？入れない

アンケートの結果期間は今から一週間！
17日の22:00まで！

9話（前書き）

このままだとアンケート結果は圧倒的で？になりそうです。

9話

今日は入学式……原作開始の日だ。

1年5組そこが俺たちの教室だ。

原作どつりキヨンの後ろにハルヒと言う順だ。

俺の席は窓側の一番前。結構、陽の光があたってポカポカして眠くなってくる。

入学式が終わって自己紹介タイム。

どんどん自己紹介を言って今はキヨン。

その何て事が無い普通の自己紹介が終わって涼宮ハルヒが立ち上がる。

「東中学出身、涼宮ハルヒ」

此処までは良い

「ただの人間には興味ありません。この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら、あたしのところに来なさい。以上」

ここから始まるんだな。キヨン達SOS団が。

それにしてもどうなんだこの空気。東中学出身の人は大丈夫だろうけどそれ以外は？マークを浮かべてるぞ。ご愁傷様。

まあ、そんなんで今日は終わり。ハルヒ筆頭にみんなが帰る。

そして俺も帰ろうとしたところにキヨンと国木田が来る。

「おう、どうしたキヨン？」

「いや…ちょっとな、なあ、あいつのことどう思うっ？」

「何だよキヨン？あいつのこと好きになったのか？」

「そうなのキヨン？でも確かに。キヨンって変な人好きだからね。」

「ちがうぞ！俺は涼宮ハルヒの事なんか好きじゃねえ！」

「おれ、一言もハルヒ何て言っていないけど………なるほどなあ【二
ヤニヤ】」

「キヨンにも春が来たって事かな？」

「そうか〜頑張れよ〜」

「おい！違うからな！」

そうして入学式当日の学校が終わった。

さらに同日午後4時前後

俺と麻衣はいつもの待ち合わせ場所に一緒に居た。

「それで？そっちの学校はどうだった？進学校だから大変じゃないか？」

「そうだね、普通だったよ。そっちはどう？」

「キヨンと国木田と一緒にのクラスになった、そこに変なやつがいてさ、たぶん半年ぐらいしたらここから入んで有名になると思っよ。」

「ふ〜ん？その人って女の子？」

「……………うん」

「可愛い子？」

「……………うん、外見だけ見ると」

「……………私とその子だったらどっちが可愛い？」

「……………普通にしたらあっち」

「ふ〜ん、そうなんだあ〜」

「違つぞ！可愛いで言つたらだ！普通の状態だとたぶんあつちが可愛い系で麻衣！お前はクールビューティーな綺麗系なんだ！それに俺と二人だけの時は麻衣が一番可愛いぞ！！」

「……………あんまり……………その……………そうゆうことはこんな人が一杯居る所で言つてほしくないな……………恥ずかしいじゃないか…………………………」

「……………ああ！ゴメンじゃあ行くか！」

「……………うん……………」

そうして俺たちは少しぎこちなかったが、少しづらづらして、ファミレスで夜ご飯を食べて麻衣を家に送つてそのまま帰って寝た。

10話(前書き)

一応アンケートは続けるけど、99%の確率で?でしょうね。

10話

入学式から数日。

朝、みんなが登校してきて席に付き始める少し前の事である。

キヨンがハルヒに話しかけた。

「なあ、しょっぱなの自己紹介のアレ、どのへんまで本気だったんだ？」

しかし、涼宮ハルヒは不機嫌面のまま、答える

「自己紹介のアレって何」

「いや、だから宇宙人がどうとか」

「あんた、宇宙人なの？」

「……違うけどさ」

「違うけど、何なの」

「……いや、何も無い」

「だったら話しかけないで。時間の無駄だから」

……キヨンがかわいそうだ。普通の男子高校生だったらトラウマもんだぞ。

（それから一週間）

昼休みは俺とキヨンそして国木田、ついでに谷口と飯を食っている。谷口はうるさい、女子を見る目がキモい。ただの発情猿だ。

そこに発情猿からキヨンに、

「お前、このまえ涼宮に話しかけてたな」と、いう。そしてキヨンはうなずくだけ。

「わけの分らん事言われて追い返されただろ」

そして、谷口はゆで卵の輪切りを食べながら続きを話す……………汚い。

「もしあいつに気があるんなら、悪い事は言わん、やめとけ。涼宮が変人だったのは充分わかったろ」

そこからは谷口が涼宮ハルヒの非常識な事を言う。

そして谷口の馬鹿話。

どうやら谷口は女子をランク付けしているようだ。唯のアホだな。

そんな事をすればモテないのは確実なのに…

さらには、A Aランクプラスと谷口が言う、朝倉涼子の話になった。ほんとどうでもいい。

谷口、否、アホ口は絶対モテ無いな。

それにしても朝倉涼子が……………介入するべきか、否か。まあ、大丈夫だろ。原作どつり行く。

それから原作どつりだった。

涼宮ハルヒの毎日変わる髪形に笑わなかった俺はすごいと思う。

それからは何もなくて日々が過ぎて行った。

途中谷口が彼女いない同士楽しくやろうぜとか俺達に言って来たけど。

『俺、彼女居るから』

って言ったら、『裏切り者！相手は誰だ！この学校に居るのか！』

などと聞いてきた。

そのとき国木田が『優真の彼女は佐々木さんって言ってね、進学校に通ってるんだけど、美人な人だよ。でも話しかけたりとかはしない方がいいと思うよ。優真以外の男には見向きもしないから』

と、谷口に言っていた。それを聞いた谷口+クラスの非モテ男子達から殺気のもった視線を送って来た。

唯一谷口だけが襲いかかって来たから。

拳で O H A N A S I してあげた。このおかげで、俺は男子どもから恐れられる存在となった。

ちよつと悲しかった。だって話しかけようとすると後ずさるんだよ！まあ、1ヶ月でもしたら元に戻ると思うけど。

それは置いていて。

俺も涼宮ハルヒのまねをして部活巡りしてみた。

結果、全ての運動部にしつこく勧誘されました、まる

そして北高では、一年に『変な女』と『異常なぐらいすごい男』が居ると噂になりました。

10話(後書き)

次書く時はアンケート終了後になりそうです。

11話(前書き)

アンケート結果の前にゴールデンウィークの話。

思いつかなかったので短いです。

11話

ゴールデンウィーク。
今年もそれがやって来た。

俺は今、旅行中。

同行者は佐々木家族。

中学のころに会ってから結構仲良くなっている。

旅行先は京都。

お義父さんと、お義母さんは京都の旅館で温泉に入っています。

現時刻 AM10:00

俺と麻衣は、京都の観光地巡りをしている。

「なあ、どこ行く?」

「そつだね……………映画村でも行く?」

そして映画村へ…

「おお〜! すぐ〜ホントに時代劇のセットだなあ〜」

「あんまりおおきな声を出さないでくれるかい? 周りの人の注目が集まるんだよ」

「ああ、そつだな……………おっ! あの店に行こう!」

「あ！ちよつと待って！」

俺たちが来たのは着物が借りられる店。1日レンタル1万となっている。

「麻衣。着物着てみて！」

「う、うん」

麻衣は店の奥に入っていく。そして着替えが終わったのが出てくる。

「おおっ……………」

「どうした？黙っていると解らないじゃないか……………その……………似合うか？」

「ぐはっ（な、何だこの可愛い小動物は！！）」

「お、おい大丈夫か？」

「あ、ああ大丈夫だ……………」

「おい、鼻血出てるぞ……………」

そんな感じでゴールデンウィークを過ごしました。

後日それを谷口に言つと……………」

『くそっ！なんでお前みたいな奴がそんな言い思いしてるんだよ！！』

と、怒鳴って来た、うざかったので一発殴っておました。

11話（後書き）

ここでの京都の話は作者の妄想なので、こんな店（着物を貸してくれる店）が無くてもある事においておいてください。あと、作者は一度も京都に行った事はありません。

12話(前書き)

アンケート結果は？

12話

ゴールデンウィークが終わって、最初の学校の日がやって来た。その日俺はキヨンより早く学校に来ていた。教室で席に座って本でも読んでいると聞き覚えのある声がすぐに耳に入ってきた。

「曜日で髪形変えるのは宇宙人対策か？」
キヨンが涼宮ハルヒに声をかける。

「いつ気付いたの」
無表情、だがその顔に怒りの文字は出ていない。

「んー……ちょっと前」
「あっそう」

そして、涼宮ハルヒは頬杖をついてこう言う。

「あたし思うんだけど、曜日によって感じるイメージってそれぞれ異なるような気がするのよね。色で言うと、月曜は黄色。火曜が赤で水曜が青で木曜が緑、金曜は金色で土曜は茶色、日曜は白よね」

するとキヨン達は。

「つつことは、数字にしたら月曜がゼロで日曜が六なのか？」

「そう」

「俺は月曜はーって感じがするけどな」

「あんたの意見なんか誰も聞いてない」

「……そうかい」

討論会を初めて勝手に終わった。

「あたし、あんたと会ったことがある？ずっと前に」
ハルヒが問うと。

「いいや」キヨンはそっけなく答えた。

そして翌日。

涼宮ハルヒの髪形が長髪だったのから、肩のあたりで切りそろえられていた。

それからは朝、HR前のキヨンと涼宮ハルヒ『これからはめんどくさいからハルヒと書く』の会話はクラスのちょっとした名物になっていた。

ある日の休み時間

俺達四人は一緒に弁当を食べていたとき、谷口がキヨンに疑問をぶつけた。

「おい、キヨンどんな魔法使ったんだ」

「魔法って何だ？」

「俺、涼宮が人とあんなにしゃべってるの初めて見るぞ。お前何言っただんだ？」

それを聞いて、キヨンが困惑していると。谷口が
「驚天動地だ」

と、言う

「昔から、キヨンは変な女が好きだねえ」

そんな話をしてる時に……

「あたしも聞きたいな」

朝倉涼子が現れた

13話(前書き)

私は今ここに!!復活した!!

と言っわけで更新が遅れてすみませんでした。

13話

その後、朝倉とキヨンがすこし話していた。

短くまとめると……………

朝倉『よかった！涼宮さんに友達ができて！これからは涼宮さんに何か言うときはあなた経由で言うわね』

キヨン『そうですか……………はあ』

こんな感じ。

まあ朝倉さんもこの頃はよかったんだよね、まったく。

それにしてもどうしようかな？傍観者としてじっとしていようか。情報思念体も未来人も機関の連中も何のアクションもしないからな……………よし！村人Aぐらいの立場のモブになっておこう。

あれ？でもどうしよう？麻衣ってハルヒと同じような能力を持つてるんだよね？そして麻衣中心に第二のSOS団が作られると！なんてことだ！これではストリーが狂う！なんだ？俺はキヨンと対極の立場に居るのか！？……………まあ、いいか。

実はこれ結構時間を考えて考えたことである。その答えが『まあ、いいか？大丈夫だろ』になった。何かテキストだな〜と思っっているこのごろ。今の俺なら言える！佐々木 麻衣…否、桜井 麻衣（将来この名字に変わればいいと思う。いや！するんだ！）が居れば

俺はどこだっ て生きていけるぞ〜〜!!!!!!

と、まあこんな事を考えていたら、いつの間にかSOS団が出来てさあ、副団長の古泉君までしっ かり居てさ！朝倉さんは転校〓消えたしさ！もうなんだか！ファイナーレが近いよ!!。

まあ、そんなんで今日……………の夜、キヨンとハルヒが夢の中で異空間に入ってイチャつく日だったわけ！

どうしてこうなった!!…って言いたい。いや、まあ。10割方俺の自業自得なんだけども!!…!!…!!

……………寝よ。

13話（後書き）

いきなりの急展開ごめんなさい！

憂鬱編の話が思い浮かばなかつたです。ハイ。

何やってもキヨンとか長門とかに主人公の正体がばれてしまつから。

でもこのごろどうしてか原作後の事ばかりが思いついてしまつ。

キヨンとハルヒと主人公と麻衣が同じ大学行つて。

国木田が鶴屋さんを追いかけて行つたり

谷口は浪人してバイト生活してたり。

そんなことばかりが思いついてしまつ俺はダメなのか……………

……………はあ〜

14話

次の日……ハルヒがポニーテールになっていました。まる

それから、普通の日々が過ぎて行った。

キヨンの溜め息が増えたような気もするが、ハルヒに振り回されて、嫌な顔せず一緒に居るってことは、まんざらでもないんだろっなあ

……

まあ、そんな日々が続いて、6月になりました。

大体クラスのみんなの名前を覚えたり、俺にとってはこれからが高校生活なのかな？

ああ！あと部活なんだけど、特にやることもなかったし、やる意味が無かったんで、どこにも所属してません。

ハルヒみたいに新しい部活でも作っちゃまうか？

まあ、今考える事じゃないか。

そして休日……

SOS団+ で野球大会に出る事になった。

俺も出る。

キヨンから誘いが来たときは、どうするか迷ったが行く事にした。

それで守備位置は。

ピッチャー ハルヒ

キャッチャー 古泉

ファースト 国木田

セカンド キヨン

サード 鶴屋さん【朝比奈さんの友達】

ショート 谷口

センター 長門

レフト 俺

ライト 朝比奈さん

となった。ちなみに打順は

1番 ハルヒ

2番 朝比奈さん

3番 長門

4番 キヨン

5番 俺

6番 古泉

7番 国木田

8番 鶴屋さん

9番 谷口

となった。

ちなみに応援はキヨンの妹一人である。

試合が始まって。

ハルヒがいつまでは良かった。

ハルヒはしっかりとボールを打って出塁。

1番の仕事をしっかりとしたな。

しかしそのあと、三者凡退。

普通にチェンジ。

守備ではハルヒがピッチャー。

結構ボールの速度が速い。何キロぐらいあるんだろうか？

一人目 三振

二人目 三振

此処までは好ピッチング。

三人目 場外ホームラン

四人目 二塁打

五人目 エラーでヒット

六人目 ヒット

七人目 鶴屋さんのおかげでチェンジ

そして次、俺の番。

このとき普通に凡退しておけばよかったなあ〜と俺は公開する事になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9601w/>

涼宮ハルヒの世界で異世界人としてテキト～に生きていこう！

2011年11月16日01時52分発行